



ノベル付CG17枚＋
文字無差分16枚入り！

PDF
同梱

納涼！

真夏の妖怪姉妹 2020-後編-

ふたなりショートノベルCG集



火ノ女の炎美

納涼！

雪女の美冷

部屋へと舞い込んだ冷たい風は吹雪となり、中から水着の女が現れた。
「お前殿♡新しい水着を買ったのだ、見てくれ♡」
「オレの彼女の雪女の美冷だ。しかし現れた間が悪かった。」
「って!! 姉上!! お前殿と何をやっておるのだ!!」
「美冷か、ふっふっふん、実はの、さっきお前殿はわしのカレシになったのだ♡」
「な...なにを勝手なことを!! お前殿!!」
「あ...オレなんも知りません...」
「そういうわけじゃから、帰った帰った」
「そ、そうわいかんぞ、姉上!! こうなったら水着勝負じゃ!!」
「ほほお、よからう!! これを見よ、お前殿!!」
「翻った瞬間、水着へと着替えた炎美。」
「しかしそれはとてつもなくエロい、極小水着だった。」
「おのれ、そんな変態エロ水着で色仕掛けしようなどと...さあ、お前殿」
「どっちの水着がよいかの?」
今、妖怪姉妹による空前絶後の水着対決が幕を開けた.....

真夏の妖怪姉妹ニ〇ニ〇 ～後編～

清楚な白水着の美冷さんと、極小エロ水着の炎美さんか……

オレは今人生最大の岐路に立たされていた。

そ、それにしても二人の水着からはみ出たかわいなおちんちん……しゃぶりたい♡

「お前殿？はあーん、さては我のおちんちんをしゃぶりたいのだな♡」

呆けた顔をしたオレの顔を見て、美冷さんに気付かれてしまった。

「お前殿はけしからん男だな。水着勝負だというのにチンポに見とれるとは……ホレ、これが欲しいのだから？」
美冷さんのおちんちんが眼前にきた。ああ……す……この汗とおしっこの臭い……♡
「するいぞ美冷！お前殿、わしのも好きなだけしゃぶってよいぞ♡」
「姉上はすっこんでおれ！これは久々（昨日ぶり）のスキンシップぞ!!」
「げ、ケンカしないでくださいよ。どっちもちゃんと美味しく頂きますから。」
そうやって二人のチンポにキスをした。



「あっ……♡お前殿お……♡我のチンポはうまいか？」
「うん、おいひい。美冷チンポすごくスケベでおいひいですよ♡」
ジュボジュボとヤラシイ音を立てて、美冷さんのアイスキャンデーチンポをしゃぶり倒す。
時折舌を使ってカリ首、亀頭を嘗め回すと美冷さんは身をよじらせ悦んだ。
「あっ……あっ……♡先っぽお……♡気持ちいいのだ……♡」



「美冷さん……♡かわいいですよ……♡次は炎美さんも……♡」

「あっ……♡お前殿お、気持ちいいぞお♡」

炎美さんのフランクフルトもさっき啜っていたが、全然飽きがかず、
むしろ二人の相乗効果で新鮮な味わいだった。

「あー、うまい♡美味しいですよ、炎美さんのフランクフルト。二本ともどっちもおいひい♡」

「あっ♡んっ……♡すっ……♡お前殿そんなにジュボジュボしゃぶられるとお……♡」

「イッ……イッ……」

「ブビ……ブビ……」

「交合してやがって……さうして美冷さんの方が先にチンポから子種を吐き出してしまった。」

「はっ……はぁぁぁ……お前殿……大好き……♡」

「あんっ！美冷だけするの……田舎しもイカせてえ♡」

「わかってますよ♡」

「ジュッ……ジュッ……おとこは高速でチンポをしゃぶるとほどなく」

「あっ田舎ぁぁぁぁっ！！」

「ブッ……ブッ……」

「炎美さんのチンポからも大量の精液が吐き出された。」

「あっ……はぁ……♡お前殿……♡」

「二人ともかわい……ごちもおちんちん汁美味しかったですよ♡」



「そ、そうか、それでどちらの水着がよかったのだ？」
「どっちがお前殿の彼女にふさわしいかの？」
「え……一つと……まだわかりません」

「ぬー、同点という事か。ならば次はお前殿を
気持ちよくできたほうが勝者じゃ!!」
「面白いの勝負じゃ美冷!!」
そうして二人は押し倒された。



押し倒されたオレは炎美さんにマウントされた。
腹のあたりに炎美さんの柔らかくてデカイ尻の感触があった。
「次はチンポ合わせてお前殿を気持ちよくできたほうが勝ちじゃ」
「良からう。ほれ、どうじゃお前殿。」
美冷さんのチンポがオレのチンポをベチベチと叩いた。
「あっ……♡美冷さんのチンポが叩いてるっ♡」

「ふふっ……先っぽも良いじゃろうが、側面はどうじゃ？」
硬くなったチンポの側面同士をゴリゴリと擦り合う。
「ああっ……♡すごい気持ちいい……美冷さん……♡」
「よいし、ならばわしは逆側から責めるぞ。」
逆の側面にチンポを擦り付ける炎美。
オレのチンポは二人のチンポに挟まれる形になった。



「や…やばっ…なんだこれ…♡おまんこなんかより全然気持ちいい…♡」
「ふふっ…わしらの合体技の竿マンコじゃ。普通の女子にはでんき芸当じゃ」
チンポ同士擦り合っていると、
三人の亀頭からは先走り汁があふれ出てきた。
「ふふっ…スケベ汁が出てきおった。気持ち良からう、お前殿？」

「はっ…はっ、すく…♡」
二人の先走りは混ざりあがり、ニチュニチュ音を
立ててチンポを滑らせていた。



擦り合わせていた三人のチンポはバッキバキに膨張していた。

「あっ……♡美冷さん、炎美さん、そろそろオレ……」

「わ、わしらもそろそろイキそーじゃ……♡」

「さ……三人一緒に……♡」

「あつ!! はあああああつ!!」

ブツ!! ブビイイイツ!!

三人同時にチンポ汁をまき散らしてしまった。
三人分の大量の精液が体を汚した。





「ふっ…♡ふっ…♡たくさん出たな」
「まだこんなにスケベ汁が出るとは、お前殿はホントにエッチな男じゃな」
「ははっ…♡二人の竿マンコが気持ち良すぎて…♡」
「して、どちらが気持ちよかったのだ？」
「えーっと…合体技だったし…」
「ええい！ならば次の勝負じゃ!!」



仰向けに押し倒されていたオレの顔面に
美冷さんのおまんこが近づいて来た。
「んおっ♡が…顔面騎乗位い♡」
「ふふっ…よい臭いだろっろ」
「はっ…はい、メスの熟成された香りが…♡」
周りが見えないオレの足を上に上げると
尻の穴に何かをびとっつつける感触があった。

「おお、かわいらしいケツマンコじゃな、お前殿」
「え…炎美さん!? まさか…♡」
「ふっふっふ…お前殿のケツマンコいたさじや♡」
ぬりゅっと炎美さんの太くて硬いチンポが
オレのケツの穴に入ってきた。
「あっ♡あああっ!!!」

「ほれほれ、どうじゃ？ケツマンコを犯される気分は？メスになったみたいじゃろう？」
「あっ♡あっ♡気持ちいいですう！」
「女の子になっちゃいますう♡」
ズニズニとチンポがオレのケツマンコで
暴れまわっていた。

ケツマンコを掘られるのがこんなに
恥ずかしくて気持ちいいなんて…♡
「あん♡あっ♡お前殿、息遣いが荒い…
おまんこに当たるう…♡」
激しい快感で息遣いが荒くなっていたようだ、
美冷さんのおまんこに鼻息が当たって
気持ちよかったのか、愛液があふれ出てきていた。





「ふっ…ふっ…♡お前殿お…そろそろわし…」
「い…い…ですよ…中に…中に…中に出て…♡」
「あっ…あああっ!!!」
「ぶっ!!!フビィイ!!!」
「んあああああっ!!!」
「あっ!!!はああああああっ!!!」

勢いよく炎美さんの
精液がオレの腸内を駆け巡った。
その衝撃にオレのチンポから
いつも以上の勢いで精液が吐き出された。
そして触発されて美冷さんのチンポからも
精液が吐き出された。
三人同時にイってしまったのだ。



「あっ…はあぁあっ…メ、メスイキサイコー…♡」
いつもと違う快感にオレは身震いしていた。
「はあ…♡お前殿のケツマンコ
締めすぎじゃ、すぐイってもうたわ♡」
「我がおまんこを嗅がせておったから、
興奮して締めりがよくなっておったのじゃ」

「は、はい…美冷さんのまん臭も
すごくエッチでした…♡」
「で、どっちがよかったかの？」
「や、やっぱりまだわかりません…♡」
「ぬ、結局最終戦までもつれ込んだか!!」

美冷さんは炎美さんにまたがると二人のキンタマ同士を合わせた。
「どうだ？我らのキンタマンとは？」
「き…キンタマンこ…すぐくエッチだ…♡」
「ホレ、入れてみる♡」
「お前殿のオトコらしげところを見せるのじゃ♡」
「は、は…♡」

二人の汗でチンポはぬるんっとなっていった。
先の方では二人の竿が、入回の方では
キンタマがオレの竿を締め付けた。
「おお…すごい…」
「これもまたすぐくエッチで気持ちいい…♡」
「オレはヌルヌルと腰を動かした。」

竿のゴリゴリ感と、キンタマのタプタプ感により、
オレのチンポからは先走り液がどんどんあふれて
きていた。それに擦られることによって、
炎美さんと美冷さんのチンポからも
先走りが出てきていた。

「あっ……♥すごい……お前殿今日一番の硬さではないか？」
「ゴリゴリしておる、おチンポ気持ちいいの……♥」
チンポ同士が擦れる快感に二人は身をよじらせていた。

「あっ……♡あっ……♡イキますよ、美冷さん、炎美さん……♡」
「はあ……♡き……きて……お前殿……♡」
「中に出て……♡」
「あっ♡あああああああああ♡♡♡」

ビュ!!ビュルルルッビュッ!!

オレは勢いよくキンタマンの中に射精した。
生暖かい液が二人のカラダを汚すと同時に、
二人のチンポからも白濁液が勢いよく吐き出された。

「はっ…はああああっ…□ お前殿の精液で水着がドロドロじゃ」
「す、すいません…あまりに気持ちよくって…♡」
「ふふっ…お前殿のチンポ気持ち良すぎじゃって♡」
「ところで、最終戦の結果はどうだ？」
「え…えーっと…」
オレはとても困っていた。どちらも
本当に甲乙つけがなかった。
「や、やっぱり決められません。」

「ぬー、煮え切らん奴だな、お前殿は!!
ならば悪い虫がつかんように
これからは我が同棲する!!」
「えー！ホントっすか!？」

「待て待て、それならばわしも同棲するぞ！
決着がつかんかったからにはわしもまだ
嫁候補のはずじゃ!!」
「た、確かに…」

「これからはずーっとわしらのチンポで」
「気持ちよくしてやるぞ、お前殿」
こうして妖怪との奇妙な同棲生活が始まった。
オレの精力は持つだろうか……
（納涼！真夏の妖怪姉妹二〇二〇）

『完』

































